

連合艦隊西進す5

英本土奪回

横山信義

Nobuyoshi Yokoyama

立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～20頁までを収録したものです。

ページ操作について

- 頁をめくるには、画面上の▶（次ページ）をクリックするか、キーボード上の▶キーを押して下さい。
- もし、誤操作などで表示画面が頁途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。
- 画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみてください。
- 本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

扉 画 佐藤道明
地 図 ・ 図 版 安達裕章
編 集 協 力 らいとすたつふ

目次

第一章	地中海の壁	9
第二章	合衆国の変心	37
第三章	「時は <small>タイム・イズ</small> 至れり」	63
第四章	帰還者の一歩	123
第五章	骨肉の海戦	153
第六章	「ロング・アイランド」事件	205



60°N

北海

スカンジナビア半島

スカゲラック海峡

ユトランド半島

ヴィルヘルムスハーフェン

キール

ハンブルク

ブレーマーハーフェン

ブレーメン

ハノーバー

ベルリン

アムステルダム

ライプツヒ

ドレスデン

○デュッセルドルフ

○ボン

○フランクフルト

50°N

10°E

英国本土周辺図





連合艦隊西進す5

英本土奪回

第一章 地中海の壁

1

陸軍三式戦闘機「熊鷹」が、順次離陸を開始した。元々、艦上機として開発された機体だけに、滑走距離は短い。

米国製二〇〇馬力エンジンの音を轟かせ、二〇〇メートル前後の距離を駆け抜けたところで、着陸脚が大地から離れる。

逆ガル形という特異な主翼形状を持つ戦闘機が、イタリヤ領シチリア島の北岸上空を飛翔する。

「あれかな、敵の目標は？」

陸軍飛行第三戦隊の第三中隊長原口讓大尉は、右下方を見やった。

パレルモの港に、二〇隻以上の輸送船と護衛の小型艦艇が入港している。

シチリア島の攻略後、島西部の守りに就いている第三八師団と独立混成第二五、二六旅団、第六飛行

師団、海軍第一二根拠地隊への補給物資を運んで来た船団だ。

連合軍がシチリア島を制圧した後、枢軸軍は専らパレルモ、カタニアの飛行場と、補給物資を運んで来る輸送船を標的に、攻撃を繰り返した。

飛行場には、四発重爆撃機のアプロ・グライフトと双発高速爆撃機デ・ハビランド・ヴェルガーが用いられ、輸送船には、Uボートによる海中からの襲撃とヴェルガーの爆撃が併用された。

この日——昭和一九年二月一三日、パレルモに襲撃した敵機の目標は、まだ分からなかった。

「『鷹匠』より『鷹』。『百舌』約五〇羽。現在位置、『鳥小屋』より三四五度、二〇キロ。高度二〇〇」

パレルモの指揮所から、無線電話機を通じて情報が伝えられる。

ヴェルガー約五〇機が、高度二〇〇メートルの低空よりパレルモに迫りつつあるのだ。

「目標は輸送船だな」

原口は呟いた。

飛行場への攻撃は、グライフによる高高度爆撃との二本立てが多い。ヴェルガーのみの攻撃であれば、目標は輸送船と推測される。

「小宮一番より全機へ。続け！」

戦隊長小宮剛少佐の声が、無線電話機のレシーバーに響いた。

飛行第三戦隊の三式戦「熊鷹」は四八機。

うち五機がエンジン不調で出撃を見送られたため、現在は四三機が上がっている。

逆ガル翼の機体が、次々と左に旋回し、パレルモの沖へと向かってゆく。

昨年八月、第三段作戦が発動された時点では、「熊鷹」の装備部隊はまだ少なかつた。

第六飛行師団の上位部隊である第四航空軍の下に、独立飛行第五中隊の熊鷹一八機が試験的に配備されただけであり、一式戦闘機「隼」と二式単座戦闘機「鍾馗」が陸軍戦闘機隊の主力を占めていた。

だが、第三段作戦が終わり、第四航空軍がシチリア島に前進した現在、戦闘機隊の主力は熊鷹に代わっている。

導入時の模擬空戦で隼や鍾馗を圧倒したということもあるが、トリポリ上空の空中戦で、来襲したヴェルガー多数を撃墜した実績がものを言ったのだ。

「米国製の機体に頼っていたのでは、我が国の軍用機技術が育たないのではないか」

そう危惧する声もあったが、

「長年、米国を仮想敵と考えて来た海軍でさえ、米国製兵器を導入している。勝利のために必要ならば、導入を躊躇すべきではない」

との意見が陸軍上層部の大勢を占めたため、熊鷹の装備が急速に進められたのだ。

その機体が今、パレルモの北北西海上で旋回待機し、敵機を待ち構えている。

高度は一〇〇〇メートル。

戦闘機の待機高度としては低めだが、海面付近か

ら侵入して来るヴェルガーに対しては、低空で待ち受けるのが有効だ。

「小宮一番より全機へ。正面に敵機！」

レシーバーに、戦隊長の太い声が響いた。

原口は正面を見据えた。

水平線の向こうから湧き出すように、多数の黒点が出現している。

一つ一つが左右に広がり、航空機の姿を整える。

丸っこい機首と、見るからに馬力がありそうな太いエンジン。

六飛師がパレルモに進出して以来、何度となく銃火を交えたヴェルガーだ。

「おや……?」

原口は違和感を覚え、目を擦った。

指揮所は敵の高度を二〇〇メートルと伝えていたが、見たところ、熊鷹との高度差がほとんどない。

前方に立ち塞がる熊鷹を恐れる様子もなく、真つ向から向かって来る。

「全機、散開！」

小宮が、狼狽したような声で叫んだ。

直後、ヴェルガー群の先頭集団が機首に発射炎を閃かせた。

太い火箭が噴き延び、熊鷹に殺到して来る。

戦隊は、各小隊毎に分かれて散開するが、二機がかわし損ねた。

一機は敵弾の奔流に呑み込まれ、ガラス細工のように碎けた。分断された主翼や胴体、エンジン・プロックが、白煙を引きながら海面に落下した。

もう一機は、左主翼を付け根付近からもぎ取られた。片方の揚力を失った機体が、錐揉み状に回転しながら墜落し始めた。

「三中隊、続け！」

熊鷹二機が相次いで墜落したときには、原口は麾下の七機に下令している。

操縦桿を大きく右に倒し、急角度の水平旋回をかけ、敵機の狙いを外しにかかる。

ヴルガーの編隊が、猛速で突っ込んで来る。これまでで戦った機体よりも、速度性能が高い。

(鷹が百舌に負けたんじゃ話にならない)

そう考えつつ、原口は第三中隊の七機を、敵編隊の側方に回り込ませた。

第二小隊は小隊長の鈴木正雄曹長に委ね、自身は直率する第一小隊の三機を率いて、ヴルガーに突進する。

回り込んで来る熊鷹に気づいたのだろう、ヴルガー四機が左旋回をかけ、原口の小队に機首を向ける。旋回格闘戦を挑まんとする動きだ。

(奴らの任務は爆撃じゃない)

敵機の動きから、原口はそのことを悟っている。

これまでに対戦したヴルガーは、自衛用の火器を持たない爆撃機型、爆弾搭載量はやや小さい反面、機首に火器を装備した戦闘爆撃機型があるが、今、自分たちが戦っている機体は、どちらにも属さない。空中戦を主任務とする双発戦闘機だ。

攻撃目標は、輸送船でも飛行場でもない。パレルモに展開する戦闘機隊だ。

「二、三、四番、続け！」

原口は後続する三機に呼びかけ、操縦桿を大きく左に倒した。

熊鷹が急角度の左旋回をかけ、ヴルガーの内側へと回り込む。

旋回格闘戦を得意とする機体ではないが、運動性能の高さは、双発の重戦とは比較の段ではない。原口の小队は、敵機の内懐に食い下がってゆく。

原口は、照準器の白い環の中に敵一番機を捉えている。

もう少して発射できる——そう思い、発射ボタンを押そうとしたとき、不意に敵一番機が視界から消えた。

後続する三機も加速している。敵は、フル・スロットルでの離脱にかかったのだ。

原口は舌打ちしながらも、機関砲の発射ボタンを

押した。

両翼の前縁ぜんえんに発射炎が閃き、青白い曳痕えいこんがほとばしった。

ブローニング一二・七ミリ機関砲六門の射撃だ。

圧倒的な弾量で、網あみをかけるように敵機を押し包む。

一二・七ミリ弾が、ヴェルガー四番機の後部を捉えた。

胴体後部に火花が散り、破片が飛び散った。

速度が落ち、小隊から落伍らくくしたヴェルガーに、原口が追いつがる。

距離を詰め、敵機の左後方から一連射を浴びせる。

左のエンジン・ナセルから大量の黒煙くろえんが噴出し、プロペラが停止した。

ヴェルガーは左に大きく旋回しながら、急速に高度を落とす。

速度性能が高く、捕捉が難しい機体だが、ようやく一機を墜おとしたのだ。

「中隊長殿、右上方！」

警報が、レシーバーに飛び込んだ。原口の二番機を務める佐藤恒夫少尉さとうつねおの叫び声だった。

敵機に視線を向けるより早く、身体が動いた。操縦桿を右に倒し、急旋回をかけた。

一瞬遅れて、太い曳痕の束が、原口機の左の翼端をかすめた。

ヴェルガーが自らの射弾を追うようにして、原口機の左脇をかすめる。

敵機の攻撃は、それだけでは終わらない。右旋回をかける原口機を追うようにして、敵弾が降り注ぐ。

大口径の機関砲を機首に集中しているためだろう、複数の火箭こうげんが寄り集まった、太い棍棒こんぼうのようだ。

当たれば、一撃で打ち砕かれる。熊鷹くまたかが放つ一二・七ミリ弾の投網なみとは異なる凄みすごを感じさせた。

ヴェルガーの二、三、四番機が、続けざまに原口機の脇を抜け、急降下によって離脱する。

敵弾は、原口機の主翼や胴をすれすれにかすめる

が、被弾はない。

「原口三番より一番、敵一機撃墜！」

「原口四番より一番、敵一機撃墜！」

原口のレシーバーに、弾んだ声で報告が入った。

三番機に乗る新井勉軍曹と四番機に乗る井森啓太伍長の声だった。

原口機よりも下方に占位し、離脱を図るヴェルガーに、横合いからの射弾を浴びせたのだ。

第一小隊は、合計三機を墜とした計算になる。

「中隊長殿、敵機が！」

佐藤が注意を喚起した。

原口は、周囲を見渡した。

戦っているうちに、空中戦の戦場はパレルモに近づいていたようだ。

海上だけではなく、市街地の上空でも戦闘が繰り広げられている。

ヴェルガーの動きは直線的だ。

ひたすらまっすぐ突っ込み、熊鷹に機首からの一

連射を浴びせて離脱する。

一方の熊鷹は、運動性能を活かしてヴェルガーに立ち向かう。急旋回をかけて敵弾をかわし、敵機の側方や背後から一撃を見舞う。

ヴェルガーの機関砲弾に粉碎された熊鷹の破片が、パレルモ沖の海面にばら撒かれて飛沫を上げ、片方のエンジンを破壊されたヴェルガーが市街地に墜落し、地上建造物の間から、炎と黒煙が立ち上る。

乱戦の中、飛行場に向かう機影に原口は気づいた。

一〇機前後のヴェルガーが高度を下げつつ、滑走路の北端を目指している。地上を銃撃しようとしている動きだ。

「原口二、三、四番、続け。飛行場に向かう！」

三人の部下に命じ、原口はエンジン・スロットルを開いた。旋回に伴って速度が低下した機体が、一気に加速された。

三〇分ほど前に離陸した飛行場が、みるみる近づいて来る。

ヴルガーの編隊とは正反対に、滑走路の南端付近を目指す。

敵編隊は突撃態勢に入っている。駐機場や無蓋掩体壕たごうに収められている機体を狙っていると思われる。「やらせるか！」

一声叫び、原口はヴルガー群の前上方から突進した。

ヴルガー群の前方に位置する数機が機首を引き起こし、発射炎を閃かせる。火の玉を思わせる曳痕が、突き上げるように殺到する。

原口は、操縦桿を右に、左にと倒した。

熊鷹の機体が振り子ふりこのように振られ、ヴルガーの射弾をかわした。

敵機の頭上から押し被さるようにして、一連射を叩き込んだ。両翼から噴き延びた無数の曳痕が、ヴルガー一機を包み込んだ。

撃墜を確認することなく、後続の機体にかかる。

発射ボタンにかけた親指に力を込めるや、両翼か

ら放たれた火箭が、ヴルガーの前上方から突き刺さる。

速度性能が高い熊鷹も、地上付近では最大時速が五〇〇キロ台まで落ちるが、ヴルガーとの相対速度は、時速一〇〇〇キロ前後に達したはずだ。

射撃の機会は一瞬しかなく、撃墜を確認する余裕もない。一連射を放ったときには、既に照準器の白い環が、次の目標を捉えている。

瞬またく間に、滑走路の上空を南端から北端まで駆け抜ける。

反転し、後方を見ると、ヴルガーの残骸ざんがいが滑走路上に散らばり、黒煙を上げている様が見える。

飛行場を襲おうとしていた一〇機前後のヴルガーのうち、半数程度は墜としたようだ。

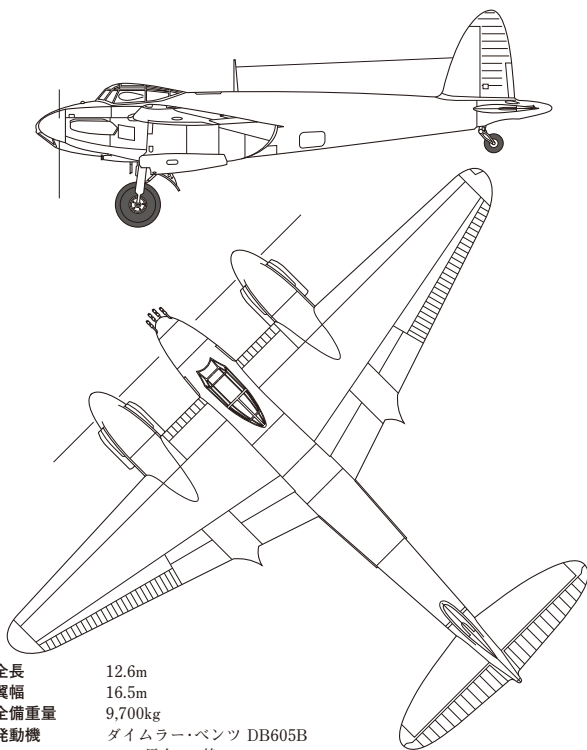
「原口四番より一番、敵機が離脱します！」

小隊の最後尾にいる井森伍長が報告した。

原口は、飛行場の西方に視線を向けた。

数機のヴルガーが大きく旋回しつつ、海上へと

ドイツ空軍 ヴェルガー J 単座戦闘機



全長	12.6m
翼幅	16.5m
全備重量	9,700kg
発動機	ダイムラー・ベンツ DB605B 1,475馬力×2基
最大速度	670km/時
兵装	20mm機関砲×4門
乗員数	1名

英国を占領したドイツは、モスキートを製造設備ごと接收、「ヴェルガー」という呼称で使用している。原型の高速爆撃機に加え、偵察機型、戦闘爆撃機型、夜間戦闘機型の派生型が作られた。さらに、米国の参戦が近いとみたドイツ空軍は、米陸軍のP38に対抗するため、単座戦闘機型を開発した。これが「ヴェルガー J」と呼ばれる本型である。時速670キロにも達する最大速度に加え、20ミリ機関砲4門の強火力をもつ本機は、対地・対艦戦闘にも用いられ、日英連合軍にとって大きな脅威となっている。

向かっている。

地上攻撃を断念し、退却に移ったようだ。

飛行場を狙ったヴェルガーだけではない。

海上や市街地の上空で、飛行第三戦隊と渡り合っ

ていたヴェルガーも、急速に姿を消しつつある。

「追いますか？」

「必要ない」

佐藤少尉の問いに、原口は即答した。

ヴェルガーは足が速いため、追跡しても取り逃が

すことが多い。

師団司令部からも、

「ヴェルガーに対しては、深追いするな」

と命じられているのだ。

逃げた敵を追うより、新たな敵に備えた方が賢明

と言える。

どのみち、原口機の一二・七ミリ機関砲は、残弾がゼロに近いのだ。

一旦着陸し、補給を受けなければ、どうにもなら

なかった。

小隊を滑走路に向けて誘導しつつ、原口は敵機に

言葉を投げかけた。

「何度来ようと思いませんぞ。このパレルモから南に

はな」

2

「右一〇〇度に艦影多数。味方輸送船団と認む」

第五対潜戦隊旗艦「球磨」の艦橋に、艦橋見張

員からの報告が上げられた。

「球磨」艦長坂崎国雄大佐は、右舷側に双眼鏡を

向けた。

水平線の向こうから、多数の艦艇が姿を現しつつ

ある。

輸送船三八隻から成るカ三六船団と、護衛に当たる第三対潜戦隊だ。

船団の周囲を飛び回る、小さな影が見える。

イタリア領リビアのトリポリに展開する第七一一航空隊の九六式陸上攻撃機四機が、潜望鏡深度に潜むUボートに目を光らせているのだ。

「パレルモの一二根（第一二根掘地隊）より入電しました。『我、空襲ヲ受ク。飛行場、在泊艦船ニ若干ノ被害アレド損害ハ輕微ナリ。ヘシチリア』以南ニ向カフ敵機ナシ。一七四〇（現地時間九時四〇分）」

船団が次第に近づく中、通信長の高田慎吾少佐が報告した。

報告電は、迎撃戦の詳細については伝えていないが、電文の末尾にある「ヘシチリア」以南ニ向カフ敵機ナシ」の一文が何より重要だ。

カ三六船団も、三、五対潜も、空襲を受ける危険はないということだ。

「断固通さぬ、と言わんばかりの構えですな」

「連合軍総司令部の狙い通りだ」

坂崎の感想を受け、司令官八代祐吉少将が満足げ

に言った。

シチリア島への陸軍航空隊の進出は、パレルモの占領直後から始まっている。

リビアのトリポリで待機していた第四航空軍が進出し、地上部隊の支援を開始したのだ。

その後、パレルモに第六飛行師団と海軍第二三航空戦隊が、カタールニアには海軍第二五航空戦隊、及び英国の空軍部隊がそれぞれ展開し、シチリアの空の守りに就いている。

航空部隊の任務は、シチリアそのものの防衛よりも、シチリア島を巨大な楯とし、同島以南への枢軸軍による攻撃を防ぐことだ。

連合軍は次期作戦の準備を始めているが、陸軍部隊や補給物資の輸送航路はシチリア島の南側を通る。

船団への攻撃を試みる敵機の阻止が、シチリア島に展開する陸海軍航空部隊の最も重要な任務なのだ。

連合軍総司令部の狙いは図に当たり、シチリアの連合軍航空部隊は、シチリア以南への敵機の進出を

許していない。

かつて、イタリアの統領ベニト・ムッソリーニは、地中海を「我らの海」と呼び、イタリアによる内海化を目論んだが、今や地中海の南部は、連合軍の内海と化した感があった。

「船団に通信。『我、今ヨリ貴船団護衛ノ任ニ就ク』」
「全艦に命令。『第一警戒航行序列』」

八代が通信室に二つの命令を送った。

五対潜はこの日、カ三六船団に先行して、シチリア島とチュニジアを分かちシチリア海峡で、Uボートの掃討に当たっていたが、ここから先は船団と合流し、護衛に当たるとののだ。

船団の周囲では、三対潜の練習巡洋艦「香椎」と駆逐艦八隻が輪型陣を組んでいる。

五対潜は、「球磨」を中心に傘型の陣形を組み、船団の前衛を務めるのだ。

麾下の第一一一、一一五駆逐隊が、「球磨」の左右に移動する。

一一一駆は編成当時から五対潜の指揮下にあったが、一一五駆は第三段作戦の終了後、五対潜の指揮下に加わった部隊だ。松型駆逐艦の兵装を変更し、対潜能力を高めた桔梗型駆逐艦によって編成されていた。

上空では、船団の護衛に就いていた九六陸攻四機が爆音を轟かせている。五対潜の合流後も、護衛を続けるようだ。

高度を一〇〇〇メートル前後に取り、海面をなめ回すようにして、ゆっくりと飛行する。

「シチリアが楯の役割を果たしていなかったら、あの機体は使えなかつただろうな」

八代が、哨戒機の動きを見ながら言った。

九六式陸上攻撃機、略称「九六陸攻」は、対独開戦の六年前、昭和十一年に制式化された機体だ。

今日では旧式機に属するが、航続距離が二三百七十里と長く、飛行時の安定性にも優れているため、海軍は同機に磁気探知機を装備し、対潜哨戒に用い

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF形式で、作成されています。この続きは書店にてお求めの上、お楽しみください。